

野尻先生との思い出

佐藤 尚人

本学社会学部社会学科で野尻俊明先生と過ごした日々を回想したいと思います。

野尻先生は、一九八九年四月に社会学部社会学科に助教として赴任されました。これは社会学部社会学科が開学して二年目のことでした。その後、一九九四年四月からは社会学部の教授になられて、一九九六年四月に流通情報学部に移籍されています。社会学部には七年間在籍されたこととなります。そしてその間、一九九五年六月からは学校法人日通学園理事・評議員 となられています。

さて野尻先生が社会学部におられたこの七年間は、社会学部にとっては草創期にあたります。一九九三年三

月に社会学科が完成して、その四月には国際観光学科が開設されました。ふりかえれば、社会学部は今年度二〇二一年度が三四年目（私は一九八八年四月の社会学部開学と同時に赴任して現在に至ります）になります。野尻先生が在籍された七年間は、社会学部にとっては独り立ちした「成人」になるための準備期であったと思います。教授会をはじめとするさまざまな会議では、私たち若手の教員も自由闊達な議論をしていました。

当時の私は、学部教員の中で最年少でした。日本社会学会の重鎮である青井和夫学部長のもと、社会学部教員の並み居る先輩方に目を見張る（目を合わせないようにする）毎日でした。大学教員として初めての日々を送る私にとって、大学教員のあるべき姿は、誰にも教授してもらえませんでした。当時の私は、見よう見まねで「大学の先生」らしき振る舞いを懸命にしていました。

そのような時に、先に述べたように開学二年目に社会学部社会学科に赴任された野尻先生も若手の教員でありました。私には野尻先生の年齢が比較的に近いこともあり、流通経済大学の伝統を知り教員としてやっていく上での「良きお手本」でした。何よりも「流通経済大学の卒業生」だったのですから。

教授会などの会議では、野尻先生が積極的に発言された姿はあまり記憶にありません。むしろ私のような「社会の怖さを知らない」若造が、あれこれ発言していました。青井学部長をはじめ年配の先生がたは、それを見逃してくれていました。野尻先生は、社会人としての経験もありましたので、後になって、「あの時の学部長の発言はね……」などと教授会での学部長の発言の意図や意味を私に解説してくれました。私はそこではじめて「社会」を知ることと少なくともありませんでした。

そのような状況の中で、野尻先生は飲み会などの非公式の場面でよく、大学創立当初の話を、そのころの学

生生活の話をも、そして、社会学部社会学科の開学当時はまだ残っていた市内「関東鉄道竜ヶ崎駅」から続く商店街の中や住宅街の中に点在する飲み屋の場所や名前、それぞれの店の特徴など、微に入り細を穿つように話をしてくれました。店の名前は失念してしまいましたが、竜ヶ崎駅からさほど遠くない、元は八百屋さんという飲み屋さんでは「この酒のつまみの中では漬物が一番うまい。元は八百屋だったのだから」としきりにレクチャーを受けました。現在の学内のトレーニングセンター（二〇一一年の東日本大震災で被災して、その後建て替えられましたが）は元は学生食堂で、学生も教員も毎日一緒に昼食をとっていたこと、当時は職員も教員も学生の顔と名前は全員について覚えていたこと、トレーニングセンターわきには学生寮と教職員アパートが並び建ち、ほぼ一日中、二四時間学生と教職員との交流があったことなど聞かされました。

創立五五年を経た現在でも「学生一人ひとりと親しく接すること」を大切にしている流通経済大学の「良き伝統」が建学当時から継承されているものであることを教えてもらいました。

また、社会学部開学当時の佐伯学長（のちの学園長）の若き頃の話もよく聞きました。ここでは割愛しますが、野尻先生から聞かされた佐伯先生についての話から「大学教員のあり方」を少なからず私は学ぶことができました。

このように野尻先生には、教員でありかつ本学の卒業生としての立場から、学生として本学で生活する側の視点での話や教育される側の視点での話と、大学教員として教育する側の視点での話との、両方を教えてもらいました。私にとってはとても良い「学習教材」の提供を受けました。

このような経緯から、若輩者の私は、時間的にも空間的にも、流通経済大学の全体を見る視点を学ぶことができたと思っています。私の専門は臨床心理学で「特定の個人をより深く、より詳しく見て理解する」という

ものですので、組織を広く全体としてみる視点も忘れずに三〇年以上にわたって大学教員を続けてこられた背景には、野尻先生から教えられたたくさんのお話があったからだと思い感謝しています。

このように、野尻先生ご自身が本学卒業生であるということが一番の理由だと思いますが、「学生をまず第一に考えるという姿勢」が印象的でした。それは、学長になられて、そして理事長になられてからの現在の野尻先生にも一貫して言えることだと思います。私も事あるごとにそのように思いを致すように心がけています。以上、とりとめなく思い出を述べてきてしまいました。

この文章を読まれた方が、野尻先生の流通経済大学での教員生活の始まりの一端でも想像する手がかりにいただければ幸いです。

最後に、野尻先生、以上の内容にもし、私の記憶ちがいや事実誤認による失礼がありましたなら「この若輩者めが」と笑ってお許しください。

そして、これからもどうぞお元気で過ごしてください。